稀代の戦後政治家　麻生太郎について

法学部政治学科二年 No.31761502 星野寛人

●はじめに

今回のレポート作成にあたって僕は麻生太郎を選んだ。麻生太郎のイメージは政治家としては世間の中での評価はそこまで高くないのかもしれない。というのも、首相時代の就任期間は短く、メディアに対しての受け答えもとてもぶっきらぼうである。しかし、彼の経歴を見てみると、日本の政治家には珍しく実業家の経験があり、まさかの元五輪選手という経歴があり、この事実からも彼のユニークさが垣間見える。経歴とともに彼がどんな政治家なのかを紐解くとともに、彼の政治家としての役割や存在意義を記していきたいと思う。

●麻生太郎のキャリア：麻生内閣時代まで

麻生太郎は1940年9月20日、福岡県飯塚市に生まれ、学習院大学卒業後、33歳の時に麻生産業のグループ企業の麻生セメントの代表取締役になり、社長の傍で1976年にクレー射撃の日本代表としてモリオントール五輪に出るという、政治家になる前のキャリアとしてはとても異質である。そして、1979年10月、第35回衆議院議員総選挙に旧福岡2区（現：福岡8区）で初当選し政界入りする。2008年の9月には08年自民党総裁選に4度目の立候補をし、351票を獲得。自民党総裁に就任する。9月24日、第92代内閣総理大臣に就任。麻生内閣を組閣する。また、麻生(首相官邸, 2009)はこの時の所信表明演説の際に次のように述べている。

日本は、強くあらねばなりません。強い日本とは、難局に臨んで動じず、むしろこれを好機として、一層の飛躍を成し遂げる国であります。 日本は、明るくなければなりません。(中略) わたしども日本人とは、決して豊かでないにもかかわらず、実によく笑い、微笑む国民だったことを知っています。この性質は、今に脈々受け継がれているはずであります。蘇らせなくてはなりません。

この文章は演説の冒頭にあるものであるが、国民にとってこの演説はとても楽観的で期待が持てるようなものだった。当時麻生自身にも人気があり、麻生内閣にはとても期待が大きかった。また、麻生(2009, p36)は外交面での日本の役割について次のようにも述べている。

我が日本は今後、世界各国にまたがる「自由と繁栄の弧」において、まさしく終わりのないマラソンを走り始めた民主主義各国の、伴走ランナーを勤めて参ります。

ここの文章でわかるのが、麻生自身の持つ楽観的なイメージである。麻生は祖父である吉田茂の姿を幼い頃から見ていて、日本が戦後に経済的にも政治的にも発展していった様子を知っていて、日本が現在の発展途上国の模範になるべきだという意見をこの一節では述べている。上記の文章が記載されている麻生自身の著書『自由と繁栄の弧』は彼が総理大臣だった頃に出版された著書であり、この本や諸演説を通じて麻生氏のリベラリズムな政治的観点ないしビジョンが国民に伝わり、国民は期待と抱いた。

しかし、この時リーマンショックで甚大な経済不況が起きてしまい、国民の満足度の主要な要因でもある経済状況は一向に良くなる気配を見せず、上記のビジョンとは裏腹に閉塞感や苛立ちが高まってしまった。『言論NPO』が2009年（平成21年）1月6日に発表した「麻生政権100日評価アンケート」によれば、不支持率は就任からの半年間で32.6ポイント増の65.5%にまでになった。また、自民党内及び野党からの麻生への退陣要求が高まる「麻生おろし」という動きが起こり、2009年（平成21年）9月16日、麻生は首相官邸を後にした。このように麻生の就任期間を見てみると、とりわけ長期政権であったわけでもなく、何か具体的なマニフェストを掲げてある程度アクションを起こし、国民に対してインパクトを与えたわけでもない。では、麻生の首相政治家としての役割は小さかったと評価していいのだろうか。麻生が次に政権の表舞台に立つ時に、彼の役割への評価というは明らかになる。

●麻生太郎のキャリア：副総理兼財務大臣時代(第二次安倍内閣)

政権交代した民主党政権が終わりを告げ、再び自民党政権で第二次安倍内閣が発足した当時、麻生は副総理兼財務大臣として組閣メンバーに加わっていた。この当時の安倍から総裁選出馬時に支えてくれた麻生への信頼はとても厚く、元TBS報道局の社会部及び政治部の報道記者であった山口敬之(2016:116)によると、「安倍首相は麻生氏の事を『常々仁義を大切にしている麻生さん』と語っていた」という人間性への評価が垣間見えたという。また、組閣時に麻生が信頼されていた高村正彦が組閣メンバーに加えられたことにより、その当時の重要な政治トピックである「経済」と「安全保障法制」を二人に任せることができた。

ここで麻生がこの「経済」の面で大きな役割を果たす。当時麻生は消費税増税問題について安倍と異なる意見を持っていた。2014年4月1日に8%に引き上げられた消費税は2017年4月に10%にまた引き上げる予定であったが、安倍考えでは、消費税増税を先送りに衆議院を解散すべきという考えだった。しかし、麻生の考えでは衆議院の解散を明言する際に消費税増税先送りを明言すべきではなく、解散を明言する時に「予定通り増税するか、先送りするかの判断を私に託してほしい」(山口, 2017; 158)と意見が食い違っていた。また、さらにいうと「安倍を、小泉みたいな『やれる消費税増税をやらなかった総理』にしたくない」(山口, 2017; 158)という考えがあり、麻生の本音は消費増税を今すぐにすべきというものだった。しかし、結果的に当時の安倍は衆議院解散時に増税の先送りを明言し、麻生とは異なる意見を実行している。当時、この消費税の問題をめぐる論争はメディアからは「不協和音」(日刊大衆, 2016)と称され、安倍内閣に歪みが生まれたと報じられていた。しかし、安倍内閣は2012年12月から2018年7月現在まで5年以上も続いており、組閣メンバーに麻生も未だに財務大臣として残っている。このように要所の決断で意見が違っても関係が残ることから、この二人の関係性は政治家同士の太い絆のように感じられる。この絆を支える要因は「総理の孤独」というのが一番に挙げられると考えられる。というのも、山口敬之(2017; 46)によると、第一次安倍内閣解散時の安倍は首相官邸から他の政治家や記者への電話が途絶え、とても孤独の状態であったという。しかし、消費税増税先送り問題時の安倍は麻生という右腕役の政治家がいた。特に先述した辞任時の「麻生おろし」のような首相の孤独を知っているというのが大きいと感じられる。

●まとめ

麻生の経歴を見てみると、麻生太郎は総理の時の経験を生かして、安倍を支えたと言える。総理の時の挫折や孤独をリーダーの要所の決断時に生かし、戦後稀に見る長期政権を支えているのである。総理と元総理同士は元々違う派閥であることが多いため、絆で結ばれることは難しい。麻生のリベラリズム的考え方や義理や人情が総理を支えていると言っても過言ではないだろう。

●参考文献

麻生太郎『自由と繁栄の弧』幻冬舎文庫、2009年, p36

山口敬之『総理』幻冬舎、2017年, p46, p116, p158

首相官邸「第１７０回国会における麻生内閣総理大臣　所信表明演説」麻生総理の演説・記者会見等, 2009年 (最終閲覧日: 2018年7月7日) <https://www.kantei.go.jp/jp/asospeech/2008/09/29housin.html>

言論NPO「麻生政権 100 日評価アンケート」, 2009年 (最終閲覧日: 2018年7月7日)

<http://genron-npo.net/pdf/081214_aso.pdf>

日刊大衆「安倍VS麻生」消費増税をめぐる“不協和音”LiveDoor News, 2016年 (最終閲覧日: 2018年7月7日)

<http://news.livedoor.com/article/detail/11381226/>